

7. 夜久野末窯跡群の調査（3）

京都府立大学文学部考古学研究室

1. はじめに

2019 年から取り組んできた福知山市夜久野町の夜久野末窯跡群の分布調査については、夜久野町化石・郷土資料館が所蔵する後期古墳出土資料の実測調査の報告とともに昨年 3 月に『夜久野の後期古墳と末窯跡群』（菱田・諫早編 2024）として公表をおこなった。結果として 140 基にのぼる窯跡の存在が推測できるようになり、近畿地方北部における最大の窯業遺跡であると見なせるようになっている。この末窯跡群に対する調査はその後も続けており、京都府立大学環境科学部森林科学科佐々木尚子研究室と共同で、窯業史と環境史を接続する取り組みをおこなっている。その過程でこれまでの成果を補う結果も得られており、こうした点を中心に報告することとした。なお、本研究には令和 6 年度京都府立大学地域貢献型地域研究（ACTR）「学校・地域連携にもとづく夜久野地域の文化遺産の活用研究」を利用した。

本研究にあたっては、地元の高内、末、日置のみなさまにお世話になり、共同研究者である佐々木尚子氏、小滝篤夫氏、東昭吾氏、福知山市文化・スポーツ振興課の松本学博氏、鷺田紀子氏には、調査にお付き合いいただき、多くのご支援を得た。改めて謝意を表したい。

参加者（五十音順。所属はすべて調査時点）

小滝篤夫、佐々木尚子、菱田哲郎（以上教員）

井川瑞季、瀬川裕太郎、守田悠、吉永健人（以上博士前期課程）

山内愛弓、横白彩江（以上 4 回生）

石川達葵、依田萌奈（以上 3 回生）

栗田晋吾、鮫島聖斗、多田一郎、藤井まつり、和田佳織（以上 2 回生）

（菱田哲郎）

2. 既往の調査

夜久野末窯跡群は福知山市夜久野町に所在する奈良時代から平安時代にかけて稼働した須恵器窯跡群である。郷土の研究家である中川敦美氏を中心に 1966 年の時点で 20 基ほどの窯が確認され（京都府天田郡夜久野町教育委員会編 1966）、その後も中川氏や衣川栄一氏らの調査を通して窯跡の数が増大し、1976 年には 44 基の窯跡があると紹介されている（京都府立丹後郷土資料館編 1976）。

1992 年の高内鎌谷遺跡の発掘調査にて、古墳時代の竪穴式住居跡、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物跡が発掘されるとともに、奈良時代の窯跡に伴うとされる灰原が調査区の西側

と東側の2ヶ所で検出された（夜久野町教育委員会 1994）。加えてこの発掘調査で新たに9世紀末葉以降の土器が採集され、今まで奈良時代までと考えられてきた末窯跡群の操業時期が平安時代後期頃まで下ることが判明した。さらに1997年の日置地区末5号窯の発掘調査では、窯跡群内で最も古い7世紀前半の窯もみつまっている（夜久野町教育委員会 1997）。窯の総数は2013年の『夜久野町史』の時点で53基にまで増えていたが（菱田ほか 2013）、近年、東昭吾氏により精力的に分布調査がおこなわれ、140基を超える一大窯跡群であることが明らかとなった（東 2018）。

京都府立大学文学部歴史学科考古学研究室では、東氏の協力を得て2020年より窯跡群を踏査し、窯跡の位置と現状の記録をおこなっている（京都府立大学文学部考古学研究室 2021）。2024年には『夜久野の後期古墳と末窯跡群』（菱田・諫早編 2024）を刊行し、夜久野町化石・郷土資料館が所蔵する後期古墳出土資料の調査成果と合わせて、窯跡群の分布調査の成果や自然科学分野との協業による研究成果を報告した。（横白彩江）

3. 調査の概要

（1）調査方法

2020・2021年度と同様、窯跡周辺の立地状況や遺物の散布状況を把握するために、2023

表1 窯の現況（東 2018、諫早・菱田編 2024 をもとに踏査成果を反映して作成）

地区名	窯番号		備考	器種											時期
				蓋杯	蓋	杯H	杯A	杯B	皿A	皿B	碗	鉢	壺	甕	
関垣	1	天井崩落、右側壁残存、還元層・被熱部確認、窯体の落ち込み													夜久野Ⅴ
	2	窯体床面・側壁・天井部残存、窯体の落ち込み、上に平坦面													夜久野Ⅴ
	3	須恵器散布													夜久野Ⅳ
	4	位置確認（末5号窯として既往の調査で発掘）													夜久野Ⅰ
	5	位置のみ確認													？
	6	前庭部らしき平坦面とその下に小さな平坦面													夜久野Ⅴ～Ⅵ
	7	窯体の落ち込みあり													夜久野Ⅰ
大町田	1	窯壁片と須恵器片を採集、開鑿により地形改変がみられる													夜久野Ⅶ
	2	須恵器が少量散布													夜久野Ⅶ
	3	消滅か													？
	4	窯体の落ち込みとみられるくぼみを確認、遺物は未採集													？
	5・6	平坦面と窯体らしきものを確認、須恵器散布													夜久野Ⅶ
トウデン	1	テラス状地形が二つ並ぶ													夜久野Ⅲ
	2	緩斜面とテラス状の張り出しを確認													？
	3	急斜面に遺物の散布がみられる													？
	4	テラス状地形と緩斜面を確認、広い範囲で遺物の散布がみられる													夜久野Ⅲ
	5	窯壁片を採集、遺物の散布はほぼ皆無													？
	6	テラス状地形を確認、須恵器散布													夜久野Ⅳ
	7	テラス状地形を確認、窯壁片を採集													？
	8	遺物の散布はみられるが、8号窯前面に水田が広がっていることから灰原は消失した可能性がある													夜久野Ⅱ
	9	窯壁を採集、灰原が露頭													夜久野Ⅲ
	10	10号窯として報告されるが、平場であり作業場が想定できる、散布地で遺物の採集													？
	11	4・5号窯に近接する窯跡を想定、遺物の散布を確認													？
日ノ本北	1	20) 二次堆積 21) 窯体・前庭部は確認できなかったが、崖面で灰原層を確認													夜久野Ⅵ
	2	灰原層露出、上方に平坦部、窯体・前庭部は確認できなかったが、崖面で灰原層を確認													夜久野Ⅵ
	3	20) 二次堆積？ 21) 山の斜面全体に遺物が散布するため、窯は頂部に存在すると考えられる													夜久野Ⅵ
	4	南側斜面に露出か													？
	5	狭い平坦面が残る、窯体は確認できないが遺物を採集													？
	6	窯体・前庭部は確認できなかったが、遺物を採集													？
	7	地形が大きく改変されているが、遺物を採集													夜久野Ⅳ～Ⅴ
	8	窯壁片採集、前庭部を確認したが遺物の散布は未確認													？
	9	窯体の正確な位置は不明だが、平坦面と遺物の散布を確認													夜久野Ⅴ
	10	窯体・前庭部は確認できなかったが、斜面に遺物の散布を確認													？
	11	東氏確認できず													？
	12	窯体・前庭部は確認できなかったが、斜面に遺物の散布を確認													？
ナゲ	1	灰原露頭、上部に前庭部らしき平坦面													夜久野Ⅶ
	2	東氏確認できず													？
	3	東氏確認できず													？
	4	窯体断面露頭、天井残存													夜久野Ⅶ
	5	東氏確認できず													？
	6	東氏遺物の散布のみ													？
	7	窯体断面露頭、窯内遺物、天井残存？													夜久野Ⅶ
	8	灰原露頭、前庭部らしき平坦面													夜久野Ⅶ
	9	平坦面、窯体残存可能性、上部に平坦面があり工房の可能性													？
	10	東氏確認できず													？
	11	東氏確認できず													？

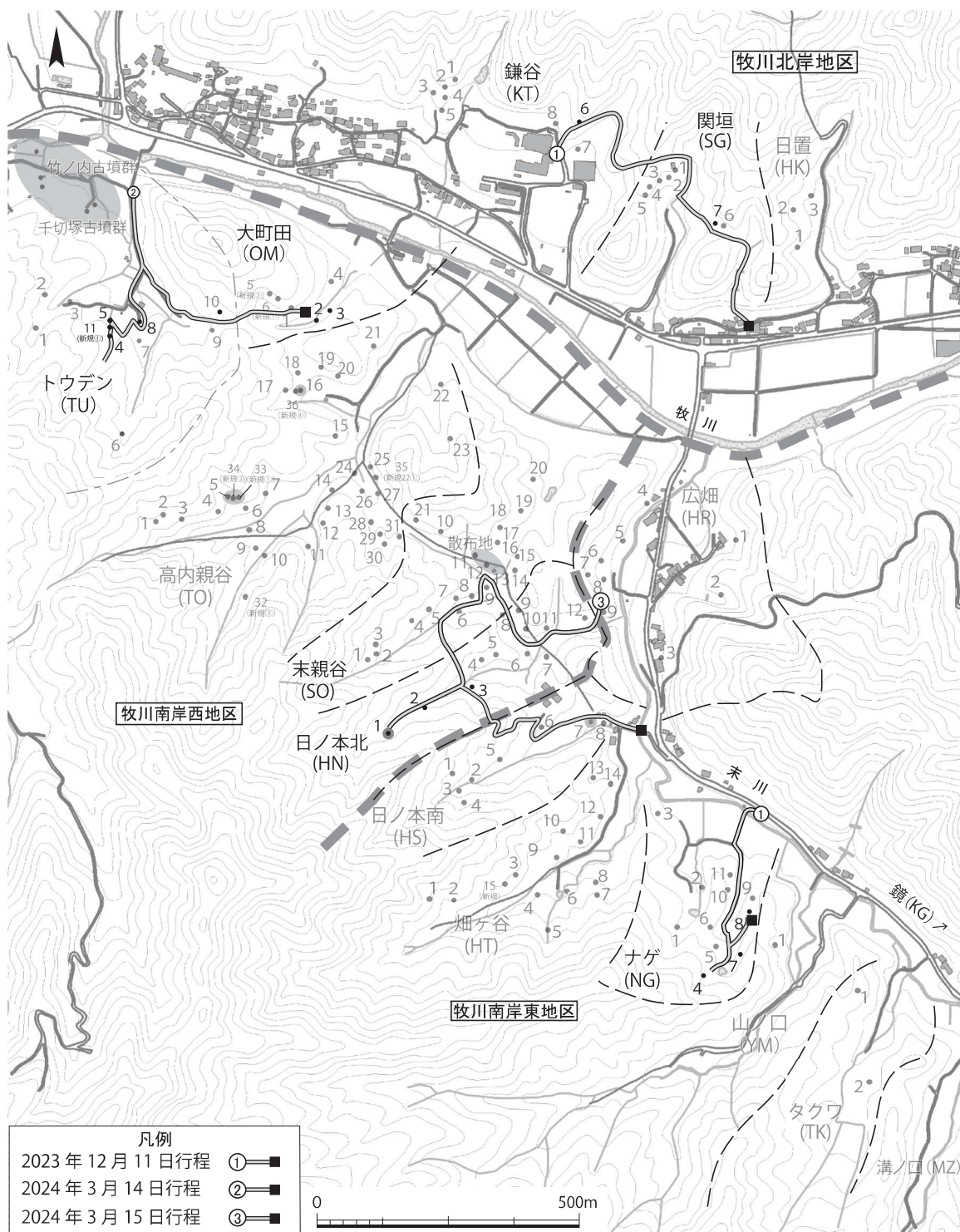


図1 調査行程

年 12 月、2024 年 3 月に踏査をおこなった。一つ一つの窯跡位置を携帯用 GPS GARMIN (OREGON 750TJ/650TJ) で記録した。遺物の採集は壺などの貯蔵具のほか、既存の器種構成を更新する遺物など必要最小限に留めた。今回の踏査では、一部の窯跡で炭化物の採集をおこなっている。窯の名称については京都府立大学文学部考古学研究室による総合報告（菱田・諫早編 2024）にもとづく。

（2）調査行程

2023 年度は牧川南岸西地区で遺物や炭化物の採集を主目的とし、2024 年度は今までに調査がおよばず、遺物の採集が少ない窯を中心に踏査をおこなった。以下、それぞれの行程を記す（図 1）。

2023 年 12 月 16 日 関垣 1・7 号窯、鎌谷 6 号窯、ナゲ 4・7・8 号窯

2024 年 3 月 14 日 トウデン 4・5・8・11 号窯、大町田 2・3 号窯

15 日 日ノ本北 1・2・3 号窯

なお調査した窯の現況は表 1 のとおりである。（山内愛弓）

4. 採集遺物について

今回の踏査では灰原と考えられる堆積の露頭や新規窯の位置の確認、須恵器の散布を確認することができた。新しく確認した器種や器種を判別しうる破片を中心に採集し、その中でも特徴的なものを実測した（図 2・3、写真 1）。なお、器種名については原則として奈良文化財研究所による器種分類に従う（神野・森川 2010）。

（1）関垣支群 7 号窯

立地 関垣支群は牧川北岸の北方にのびる大小 2 つの谷がある支群である。7 号窯は鎌谷支群の大きな谷の東側、東西方向の比較的浅い谷に 6 号窯に隣接して位置している。丘陵の鞍部西側に細長い落ち込みを確認しており、窯体であると考えられる。前庭部と考えられる地点の南側で須恵器片を採集している。

遺物 1 は杯 H である。体部は直線的となっている。立ち上がりは内上方にのび、端部を尖らせる。受け部は一部黒色化している。（石川達葵）

（2）大町田支群

立地 牧川南岸北地区の最北に位置する支群で、南西から北東に開く谷の両側に計 6 基の窯跡が分布する。2 号窯は大町田支群の南側斜面に位置する。窯跡の痕跡を明瞭に示す地形は確認できないが、南東向きに傾斜する斜面裾で灰原を確認している。斜面裾には沢が流れており、その沢から遺物を採集した。3 号窯は 2 号窯に近接するが、明瞭な地形などはみられない。2 号窯と同様に、斜面裾付近を流れる沢から遺物を採集している。

遺物 2 号窯では椀（2）、3 号窯では甕（3）を採集した。19 は平高台の椀で、底部に糸切による切り離しの痕跡を残す。3 は広口甕の口縁部。口縁部は内側に屈曲させたのち端部を上につまみ上げる。

（3）トウデン支群

立地 トウデン支群は南から北へ開く大きな谷を中心に南へ分岐する小さな谷に 11 基の窯跡が分布する支群である。4 号窯は南に伸びる谷の西側に尾根の裾部に位置しており、一段高

くなる平坦地の下から多くの遺物が採集されている。北東へ谷を下がったところには 11 号窯が位置する。5 号窯は 11 号窯からさらに北へ谷を上がったところに位置し、斜面裾から遺物を採集した。窯体や灰原は斜面の中腹に存在する可能性がある。

遺物 4 号窯では壺（5）、甕（4・6～8）、5 号窯では杯 B（9）、8 号窯では蓋（10・11）、杯 A（12）を採集した。5 は壺の体部で肩が張り、稜角をもつ。底部に剥離の痕跡を残すことから本来は高台が付くものであったと推測される。4 は甕の口縁部。口縁部から頸部の長さが 4cm と比較的短く、器壁も薄い。内面には口縁部を取り付けたのちナデで調整する。6・7 は甕の口縁部。口縁部にかけて大きく開いてからやや内傾ぎみに立ち上がる。端部には面を持ち、内側に肥厚する。口縁部付近には断面三角形の突帯を 1 条めぐらせ、その下方に波状文を施す。8 は甕の頸部。体部内面に当て具痕がみられる。9 は杯 B。体部は直線的に立ち上がり、底部外縁よりやや内側に高台を貼り付ける。10 は内面に明瞭なかえりをもつ蓋。つまみは欠損するが、東氏が報告している杯蓋と類似すると想定されることから本来は宝珠つまみがつくと考えられる。11 は宝珠つまみ付きの蓋で、内面中央に静止ナデの跡が残る。12 は杯 A。底部にケズリの痕跡を残す。（山内）

（4）日ノ本北支群

立地 日ノ本北支群は、牧川南岸の一帯において南西方向にのびる 2 つの狭隘な谷筋のうち、北側の谷筋に沿って分布する支群である。現在 12 基の窯が確認されており、今回踏査をおこなった 1～3 号窯は谷筋を入り込んだ東側に立地している。

うち最も奥部に位置するのが 1 号窯である。須恵器片を包含した灰原が露出しており、その上方には窯体と想定される落ち込みがみられる。2 号窯は 1 号窯と同じ斜面に隣接して位置している。幅約 5m 程度の灰原層が確認され、その上方に張り出した地形が認められ周辺に窯体が想定される。3 号窯は 1・2 号窯が認められる斜面に対面した北向き斜面に位置する。周囲は斜面が急角度で、斜面上方の尾根筋頂部付近に窯跡と想定しうる張り出した地形を確認することができる。

遺物 1 号窯では杯 B（13・14）と皿 A（15）を、2 号窯では杯 B（16・17）、3 号窯では蓋（18・19）、杯 B（20）、皿 A（21）を採集した。13 は杯 B である。体部は直線的に立ち上がる。14 は杯 B である。直線的な体部をもち、底部外縁に高台を貼り付ける。底部はヘラ切り未調整である。15 は皿 A で、今回の踏査で新たに発見した器種である。底部は平らで体部は大きく外反する。16 は杯 B である。外側に踏ん張る高台をもつ。17 は杯 B である。体部が直線的に立ち上がる。口縁部が焼けひずみのため内湾している。18 はつまみをもつ蓋である。天井部から体部にかけて屈曲させ、口縁端部は下方に短くつまみ出す。19 はつまみをもたない蓋である。体部が屈曲しゆるやかに外反する。口縁部は焼けひずみのため外反する。20 は杯 B で、体部が直線的に立ち上がる。底部はヘラ切り未調整である。21 は皿 A である。底部は内湾する。体部は大きく外反し、端部を弱くつまみ出す。（横白）

（5）ナゲ支群 8 号窯

立地 ナゲ支群は日ノ本北支群の南方に位置する。窯跡は東西 2 つの谷筋に分布し、8 号窯は東谷に位置する。前庭部と思われる平坦面が広がっており、完形の遺物が多数散布している。

遺物 22 は蓋である。天井部から口縁部にかけて屈曲し、口縁端部は先端を丸くおさめる。

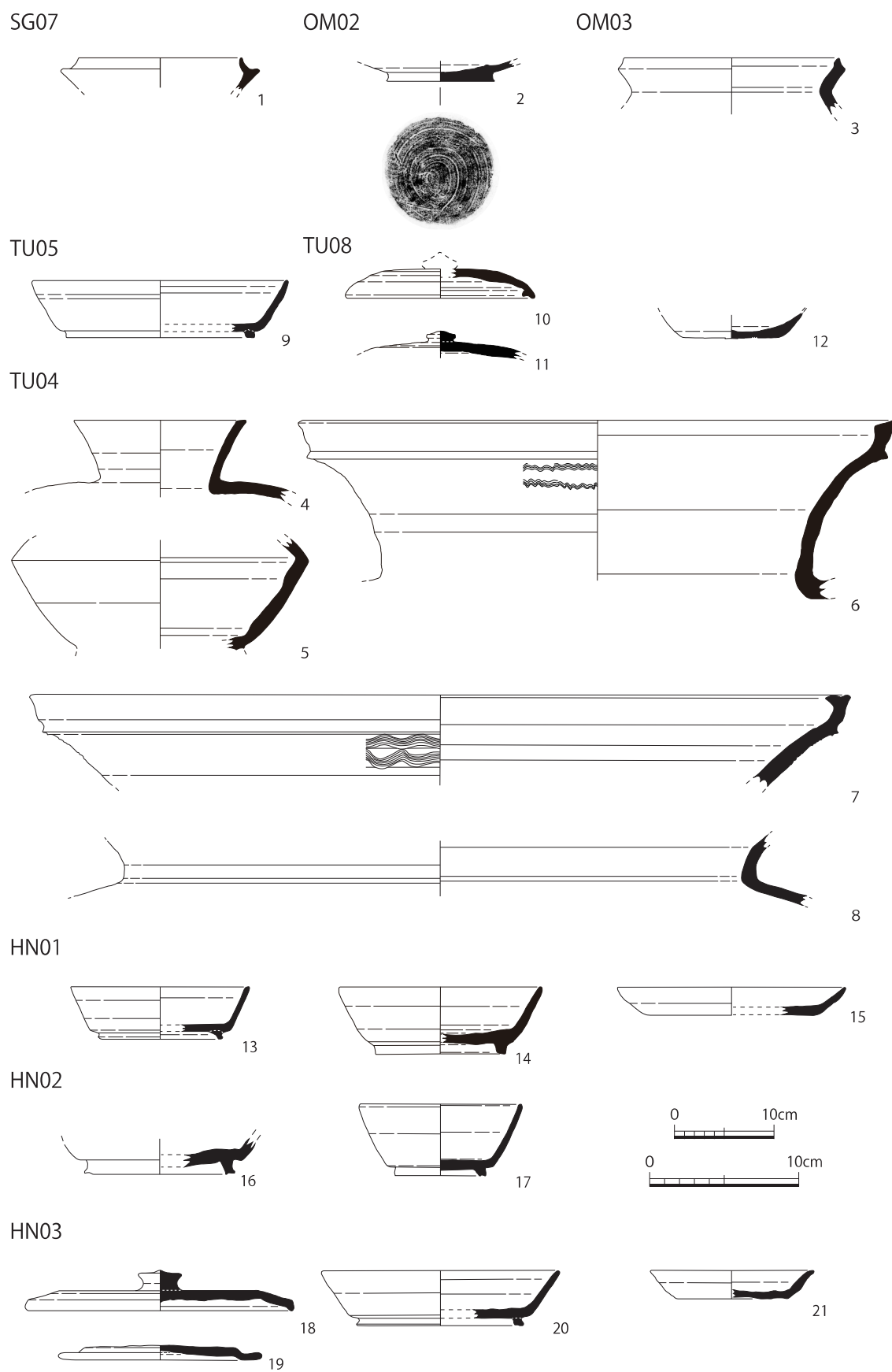


図2 主な採集遺物 (1) (S=1/4。8のみ S=1/6)

NG08

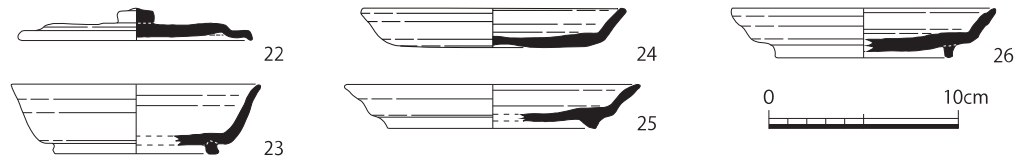


図3 主な採集遺物（2）（S=1/4）

23 は杯 B である。体部はやや内湾するが口縁端部は焼けひずみ、やや外反する。24 は皿 A である。体部がやや外反する。25 と 26 は皿 B である。25 は外に踏ん張る高台を持ち、まっすぐ立ち上がる。26 は高台がまっすぐ取り付けられ、体部は外反する。口縁部内面に上方から沈線が入る。
（石川）

5. おわりに

今回の報告では、これまでの調査で比較的資料に恵まれていない関垣地区、トウデン地区、日ノ本北地区などで新たに採集された資料を紹介した。とくに関垣地区やトウデン地区では 7 世紀の資料を充実することでき、窯跡群の消長にとって重要な手がかりを得ることができた。また、大町田支群では、2 号窯や 3 号窯に伴う資料を採集しており、窯跡群の終焉を知る手がかりを増やすことができた。これらの調査では炭化物の採集にも務めており、その検討は森林科学科の佐々木研究室において進められている。こうした成果を総合することにより、古代窯業の実態に迫ることが可能になると考えている。
（菱田・諫早直人）

参考文献

- 東昭吾 2018 『京都府福知山市夜久野町所在 末古窯跡群詳細調査報告書（1）—末古窯跡群詳細分布調査報告—』
- 京都府天田郡夜久野町教育委員会（編）1966 『郷土夜久野歴史篇 付地誌篇』
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2021 「夜久野末窯跡群の調査（1）」『京都府立大学文学部文学部歴史学科フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2022 「夜久野末窯跡群の調査（2）」『京都府立大学文学部文学部歴史学科フィールド調査集報』第8号 京都府立大学文学部歴史学科
- 京都府立丹後郷土資料館（編）1976 『丹後夜久野の文化財』
- 神野恵・森川実 2010 「平城京の研究法 土器類」『図説 平城京事典』柊風舎
- 菱田哲郎・諫早直人（編）2024 「Ⅲ部 夜久野末窯跡群」『夜久野の後期古墳と末窯跡群』（京都府立大学文化遺産叢書 第28集）京都府立大学文学部歴史学科
- 菱田哲郎・崎山正人 2013 「考古資料から見た夜久野の古代」『夜久野町史』第4巻 夜久野町
- 夜久野町教育委員会 1994 『高内鎌谷遺跡発掘調査概報』
- 夜久野町教育委員会 1997 『末5号窯発掘調査概報』



4



7



9



17



18



23



24



26

写真1 主な採集遺物（番号は図2・3と対応）

編集後記

余裕をもって仕事に取り組みたい。一つ仕事が終わる度に今度こそはと思うが、今回も果たせなかった。文字通りバタバタ。年末から長い師走が続いている。一つの救いは、春からのフィールドワークに始まり、冬の集報に終わるこの一連の営みが、10号を越え、府大歴史学科の伝統として根付きつつあること。フィールドをご提供いただいた関係各所のご厚意に深く感謝申し上げたい。

なお本書の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの合同実習メニューとして学部生が Adobe 社の InDesign を利用しておこなっているが、もちろんそのままでは本にはならない。一書にまとめるにあたって力を尽くしてくれた大学院生の頑張りにも深く感謝したい。(い)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第 11 号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2025 年 3 月 31 日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
